

「みんな、クラスごとに整列して！ 委員長、点呼して報告！」

体育館では、ざわつき、あるいは泣きじゃくる生徒があふれる中、生徒たちを引率してきた藤原先生が冷静に指示を出していた。

その隣で、心配そうな表情の林先生が生徒の人数を指差ししながら数えている。

「A組、21名です……」

林先生が数え終えるより早く、各学級の正副クラス委員長たちが点呼を終えて報告を上げる。結局、この体育館内に無事避難できたのは次の通り。

- ・ 1年生 26名（体操着なのは体育館で体育の授業をしていたため、そのおかげで避難できた）
- ・ 2年生 56名（A組 21名 B組 20名 C組 15名）
- ・ 3年生 11名
- ・ 教師 2名（藤原、林）
- 生徒・教師合計 95名だった。

私物のカバンを携えている者もいれば、靴下のままの生徒もいる。

2年A組はマリ、上田、石田、そして前田の4名以外全員無事である。

「石田くん、どこへ行っちゃったのよ？」

クラス委員長の石田に代わり、副委員長の大谷さんがA組の最前列で取り仕切っていた。「今日、欠席していたのは仙石さんだけね」

A組にマリがいないと聞いて、一時は心配した那須シズカだったが、他の生徒のように泣いたりはしない。今は、C組のクラス委員長として行方不明のクラスメイトの把握に努めなければならぬ。

「明智くんは？ 体育館内にいないんだけど！」

せわしく動いているシズカのもとに、血相を欠いたサトミが人をかきわけ駆けつけた。

取り乱すサトミに、シズカは黙って首を振った。

「そ、そんな……」

涙をこらえようと口元に手を当てたサトミ。

サトミの姿を見かねたシズカは、彼女の代りにC組の生徒に尋ねて回り始めた。

「誰か、明智くんを見た人はいませんか？」

「俺、見たよ」

一人の生徒がシズカの問いに答えた。

「どこで？」

男子生徒にダダッとサトミが詰め寄った。

「と、途中、体育館の入り口付近まで一緒だったんだけど……」

眼前に迫ったサトミの迫力に、タジタジで答えた男子生徒。

「私は、宮本君とふたりで校舎の方へ引き返して行ったのを見たわ」

「そっ、いや俺も見た」

続々と明智の目撃情報が寄せられた。

「じゃ、まだ校舎内に居るのね……」

サトミはそうつぶやくと、体育館と校舎をつなぐ渡り廊下に目をやった。

“ピンポンパンポーン”

その時、体育館に校内放送を知らせるチャイムが鳴り響いた。

「私は、2年A組の遠山マリです」

スピーカーを通してマリの声が体育館内に響き渡る。

「遠山さん」

お互いの顔を見合わせたA組のクラスメイト達。

「校内、放送室からお伝えしています——」

●——放送室

座席に座りマイクに向かってしゃべるマリ。その傍らに立つ上田。石田は窓際で外の様子を監視している。

「ここには私の他に、上田ヒロユキ、石田ダイキチの2名も一緒です」

上田と石田がマリの目を見てうなずく。

「校舎内は非常に危険な状況です。残念ながら、つい先ほど私たちは、大勢の生徒が倒れているのを見ました。そして、みんなの知っている先生方は、今やいないと言わねばなりません……」

込み上げて来る感情で言葉に詰まったマリを、上田は無言で見守る。

「とにかく、学校も、学校の外も異形の者たちであふれ返っています……」

マリの放送が響く校舎内では、以前として死肉をむさぼる変異者たちが生き血を求めて彷徨っている。

「この放送をまだどこかで聞いている人たちは、学校裏の城山へ避難してください！ 決して、街の方へは逃げないで！」

学校のどこかでこの放送を聞いてくれている人がいることを信じて、マリはマイクに向かって話を続けた。

「体育館の裏手に虎伏山頂上の八幡城へとつづく登山道があります。一本道で、その道をたどれば八幡城まで到着します。私たち3人も後から必ず行きます。どうかみんなお互いに助け合って、一人でも多く無事にお城までたどり着けますように……ご武運を！」

マリがマイクのスイッチを切ると、上田がよくやったというようにマリの肩に手をやった。

「や、奴ら正門を乗り越えて校庭へ侵入してきたぞ！」

窓から外を監視していた石田が声を上げて急を報せた。

「よし、俺たちも急ごう！」

上田は放送室のドアまで歩み寄ると、少しだけ開いて廊下の様子を確かめた。廊下には動く者の気配はない。放送室から恐る恐る出た3人は、体育館へ足を向けた。

「待ってくれ」

しかしその時、石田がふたりを静止した。

「ケータイ電話だよ。毎朝、俺と大谷がみんなから集めるだろ？ あれはいつも職員室のロッカーに保管してあるんだよ」

「そうか！ ケータイか！ それがあれば外部と連絡が取れる」

上田がでかしたとばかりに石田を見る。

「でも、職員室は体育館とは別の方向よ」

辺りの様子をうかがったマリは、一刻も早くここから逃げ出したいと首を激しく振った。

「ここは外部と連絡を取ることのほうが先決だ！」

「俺も、委員長に賛成だ」

石田の力説に上田が合意したことによって、3人は体育館ではなく、職員室へ向かうことになった。